

天台維摩經疏の思想研究

——四土説を中心として——

井上智裕

はじめに

本論文は平成二十三年度大正大学学位請求論文（課程博士）「天台維摩經疏の思想研究」より、第五章以下の天台維摩經疏に説かれる四土説についての論考を中心として改稿したものである。

（一）天台維摩經疏について

天台維摩經疏は、智顗の思想体系の円熟した最晩年のものであり、智顗の思想を研究する上で親撰に準じる価値のある書物である。また天台維摩經疏は晋王広に献上するために撰述されたものであるが、四教、三觀という天台の根幹となる思想を述べるものであり『維摩經』の解釈書というだけでなく、天台教学の概論を述べるという性格をもっているのである。さらに、その分量は、合計すると三十巻を超え、法華三大部に匹敵する膨大な量であり、智顗の維摩經疏撰述に対する並々ならぬ熱意が伺えるのである。このようなことから天台教学における維摩經疏の研究は重要な分野と考える。そこで、この天台維摩經疏を中心として天台の思想について考察を試みる。

まず天台の教学における『維摩經』の位置付けと智顗の『維摩經』理解について概観する。智顗は『維摩經』の教相を判じて、五時教判の中、第三方便時の教とし、褒貶抑揚によって不思議解脱を説く經典とする。方便時は化法四教を並説するとされるが、『維摩經玄疏』においてその四教について、

問うて曰く。方等大乗も亦た四教を具す。何が故に五味の義を成ぜざるや。

答えて曰く。聲聞の作佛を明かさざれば、五味之義は成ぜず。不定の中に約して

天台維摩經疏の思想研究

四教を論ずることを得る也。

と、方便時においては、聲聞の作佛が明かさず、五味の義を成じないというのであり、また四教は不定教にことよせて論じられるというのである。この不定教について『維摩經』の教判を論じるなかに、

今、此の經を判ずるに、是れ頓教、乃至五味の漸教、生蘇之味に非ず。若し不定教に約さば、即ち是れ毒を生蘇に置きて人を殺す也。利根の菩薩は、此の教に於て不二法門に入り、佛性を見て不可思議解脱涅槃に住す。即ち満字の教。

（大正蔵三十八・五六二b）

とある。不定教として利根の菩薩の為には『維摩經』にも佛性を説いているとされるのである。また『維摩經玄疏』の五重玄義の教相に「不思議なる帶偏顯円を教相となす」（大正蔵三十八・五一九a）とあり、その教相は方便を帯びた円教とされるのである。經の体を明かす中により具体的に、二諦を三藏教の理外の二諦と通・別・円教の理内の二諦とした上で、

若し理外の二諦、但だ世諦に非ず。此の經の体に非ず。真諦にも亦た非ざる也。若し理内の三種の真諦は即ち是れ法性実相、此の經の正体なり。

問うて曰く、祇だ応に円教の不思議の真諦を取りて体と為すべし。何ぞ理内の通別の真諦を取りて体と為すを得んや。

答えて曰く、若し是れ法華經の正直捨方便は、但だ円教の一の真諦を用いて体為すことを得べし。此の經、猶お通別の二種の方便を帶して、理内の三種の真諦、皆な此の經の体と為すを得る也。但だ傍正有り。不思議の真諦を正と為すなり。

（大正蔵三十八・五五七c）

として、通教の二諦を含め、別教の二諦・円教の二諦、の三種の真諦を經の体とする

とされる。さらに別教・通教の真諦も経体とすることについて、『法華経』と異なり傍と正があるとしながらも、『維摩経』の経体を方便を帯びる円とするのである。

このように智顗は『維摩経』を褒貶抑揚として単に小乗から大乘への教とするだけではなく不定教として佛性常住を説き、円教を基盤としながら解釈しているのである。

続いて『維摩経文疏』における分科から智顗の『維摩経』の理解をみていきたい。智顗は『維摩経』の分科について、

一つに始め如是我聞従り宝積の説く七言の偈に訖つて、文通別両序を具す。此れ正説に於て由藉の義足するを名づけて序分と為す也。二つに宝積、佛国因果を請問する従り已去、見阿閼佛品に訖て、十一品半の経文有り。皆な不思議解脱佛国の因果を明かす。皆な是れ赴機の教、現在沾益す、並びに正説と為す也。法供養品より囑累品に訖つて天帝の發誓弘経、如来の印可勸發囑累して未来に宜通し、流伝して絶えざらしむことを明かす。此れ並びに流通に属す也。

(新統蔵十八・四六四c～四六五a)

と述べている。智顗の分科は、他の諸師⁴と異なり維摩居士の教説や会坐を中心とするのではなく、品ごとに分けるのでもなく、『維摩経』に説かれる不思議解脱・佛国の因果こそが正説分であるとするのである。この佛国の因果は、『維摩経』五重玄義の宗玄義ともされるのであり、その宗玄義の中では、この因果について、

問うて曰く、若しは非因果、而因果と言ふ。今、涅槃は、何の故に但だ果にして因にあらざる。大品には、但だ因にして果にあらす。此の経は既に是れ解脱と名づく。何ぞ但だ果にあらざらん。

答えて曰く、若し通じて論ぜば、亦た此の義を得ん。而るに義に傍正有り。大涅槃は果を正、因を傍となす。大品は因を正、果を傍となす。今経は双べて佛国の因果を挙ぐ。是の故に佛国の因果を以て当に宗となすべし。……(略)……如来の述成と復宗の明義は、具さには菩薩の行を弁す。即ち是れ因を述ぶ。諸の佛土に音声ありて佛事を為し、寂滅をもて佛事を為す等を明かす。即ち是れ果を述ぶ。験に知ぬ、一教の始終、皆な因果を明かして以て佛国を成ずる。

(大正蔵三十八・五五九c)

とある。ここで『涅槃経』『大品経』は因と果に傍と正があるが、『維摩経』においては佛国の因と果のどちらも説いているからこそ佛国の因果が宗になるとされる。この佛国の因は、土を浄める菩薩行であり、佛国の果は、清浄なる佛国、不思議解脱と見

られる。このように智顗は、佛国の因果に注目し、『維摩経』を依報佛国について説く經典として捉えているのである。以下では、『維摩経』に説かれる佛国の解釈を中心として天台の思想について考察する。

(二) 天台維摩経疏における佛土説について

智顗は『維摩経』を依報佛国について説く經典として捉えているのだが、これは『維摩経』に佛土について、特に佛国品に佛土を浄めるということを三心、四無量心、三十七道品等の菩薩の行とし、「其の心の浄きに随いて則ち佛土浄し」(大正蔵十四・五三八c)というように菩薩の行およびその心を佛土として説かれることによる理解であろう。この『維摩経』を佛国について説く經典とする解釈は、天台以前の『維摩経』理解にも見られるものであり、『維摩経』の訳者である羅什は『注維摩詰経』の佛国品の品題釈に、

什曰く。経の始終は淨国に由るが故に、佛国を以て篇に冠する也。

(大正蔵三十八・三二八a)

とし、『維摩経』は、その全体において淨国が説かれる經典と理解しているのである。また淨影寺慧遠は『維摩経義記』において『維摩経』の分科を論じる中(大正蔵三十八・四二二c)、この経の二処三会の行について室外を法身淨土の因果、室内を淨土の因果、出室を法身の因果としている。このように、『維摩経』の解釈において、この経に説かれる佛土が注目されているのである。ここで『維摩経』における佛土説について見ると、『維摩経』佛国品には、「心淨土淨」が説かれ、土の様相はあくまでもその土を見る主体者の心によるとされるが、同じく佛国品には、佛によつて浄なる佛土が下劣なる人を度す為に穢土として示されるともされる。このように、佛土における浄穢の主体性を衆生の心によるとする説、主体性を衆生を教化する佛によるとする説の二つの教説が見られるのである。さらに、淨影寺慧遠の『大乘義章』において論じられるところではあるが、『注維摩経』において、佛の淨土を認める立場の羅什の説と、佛土を無としてあくまでも土ありようは衆生によるという道生の説との異なる解釈もされるのである。この仏土のありようをめぐる問題は天台においても後世、論義の一つとして「国土の苦楽」として論じられるようになる⁵。

ではこの佛土のありようを佛の化導によるとするのか。衆生それぞれの諸見とする

か。ということを知願はどのように解釈しているのだろうか。天台における佛土の相の説き方について見ていきたい。

佛土における苦楽について『法華玄義』迹門十妙の神通妙に、

若し依報に応同するは、両意有り。若し国土の苦楽は衆生に由る。佛の所作に非ず。佛は但だ応同するのみ。若し折伏摂受を作すは、佛、機縁を鑑みて或いは苦国を作り、或いは楽国を作る。苦楽は佛に由りて衆生に関わらず。

(大正蔵三十三・七五一 b)

とあり、国土の苦楽つまり佛土の様相は、衆生の所作とする場合、佛の応化とする場合の二つの意義があるとされるのである。この箇所は後に論義「国土の苦楽」として論じられるものとされるのである。また『維摩經文疏』卷一においては、

凡聖の果報に高下の殊別なれば、淨穢を現すること亦た一に非ざる也。故に瓔珞經に云く、「一切衆生の応、一切国土の応を起す」と。

或いは釈して言うこと有り、或いは国は是れ衆生の集業の感じる所、故に此の經に云く、「衆生之類は是れ菩薩の淨土」と。聖人、慈悲之力、来りて此に生を現す。故に法華經に云く、「而も三界の朽ちるの故に火宅に生ず。衆生の生老病死を度せんが為」と。

或いは、釈して言うこと有り、諸佛の法身、猶お明鏡の一切色像の悉く其の内に現するが如し。是れ則ち法身の本国従り応を出だす。国、佛に由りて有り、故に佛国と名づく。故に法華經に云く、「今、此の三界、皆、是れ我が有。其の中の衆生悉く是れ我が子」と。

(新統蔵十八・四六五 c)

とある。ここで、佛土における果報が異なるのであるから、そこに淨や穢を現すことも多種多様であり、あらゆる国土を現すとされる。続けて国土について、国は衆生の業の感じる処であつて、そこに佛・菩薩が衆生を度する為に生じるとする解釈と、国は佛による処であつて、そこを衆生がさまざまに見るとする二つの解釈がされるのである。これは、それぞれ『法華經』を經証とすることで、先に見た『法華玄義』と同様に、二つの意義を示すのである。しかし、続く箇所には、

若し応国、法身従り出だすと云わば、即ち是れ自生。若し衆生の業に従りて有りと謂わば、即ち是れ他生。若し衆生、法身に對するが故に有ることを得れば、即ち是れ共生。若し業を離れて法身を離れて而も有れば、即ち是れ無因縁生にして而も国土有る也。是れ皆な四種の性に墮す。性の義須らく破すべし。前に類して

知るべし。

(新統蔵十八・四六五 c)

とある。ここで智願は、佛土のありようについて、法身の佛によつてのみ佛土のありようがあるのであれば自性、衆生の業によつてのみ佛土のありようがあるとするのは他性、衆生と法身の佛によれば共性、どちらにもよらなければ無因性となるといった四性を示し、それぞれの性におちいる誤りであるとするのである。この性の義は『維摩經玄疏』釈名・三觀における境智分別に論じられ、そこでは、

若し境は自から是れ境と言わば、即ち是れ自性の境なり。若し智に由るが故に境と説くと言わば、即ち是れ他性の境なり。若し境智の故に境と説くと言わば、即ち自他性の境なり。若し智を離るるが故に境と説かば、即ち是れ無因縁にして境を説く。因縁従り境を説くは尚お不可なり。何に況や無因縁にして境を説かんや。四句をもつて智を説くも、其の過も亦た然り。

(大正蔵三十八・五二五 a)

と、境は境によつて境と説かれるのか、智によつて境と説かれるのか、境智によるか、無因縁によるかとして、自、他、共、無因の性としていずれも間違ひであり、智も同様であるとする。さらに続く箇所には、

一切の有無、因縁、善悪は是れ垢淨に非ず。世間出世間の類なり。此の如く檢せよ。若し此の意を用いて研覈せば、衆家が經論を解釈するに、性の義を免るること難し。

(傍線部筆者加筆、以下同じ) (大正蔵三十八・五二五 b)

とあり、さまざまな学派が經論を解釈しても、性の義におちいつてしまふと論ずるのである。すると、佛土を佛によるとする羅什の説は自性、衆生のみ土があるとする道生の説は他性にあたるように考えられないだろうか。智願は、先の『維摩經文疏』の四句推檢に続く箇所には、

当に知るべし、国土の若しは淨、若しは穢、皆な説くべからず。因縁有るが故に説くべしとは、悉檀の赴機⁸の四句は皆な説くことを得る。(新統蔵十八・四六五 c)と、国土の淨や穢も、国土が衆生によるか佛によるかということと同様に説くことができる。しかし、その佛国について佛が衆生の機に赴いて、衆生と佛との因縁によつて、四悉檀⁹をもちい衆生の機根に合せてさまざまに説かれるとするのである。

また、この因縁、四悉檀によつて説かれることは、佛国の淨穢や境智のみに述べられるものではないことが『維摩經玄疏』に述べられる。すなわち四悉檀によつて聖説法・聖默然を明かす段に、

今、此の四不可説を以つて、因縁有るが故に、四悉檀を以つて、為に法を説くを

明かす。即ち是れ聖説なり。此の四種の四諦、並びに是れ三乘聖人の証法にして、是れ凡夫の能く知るところに非ず。故に不可説也。生旨の爲に白色の相を説けども、彼の生旨は、終に見ること能わざるが如し。不見を以つての故に。故に不可説なり。不可説の故に聖説黙と名づく。

(大正蔵三十八・五二三a～b)

として、法自体は不可説なるものであるが、因縁があることによつて四悉檀をもちいて法が説かれるとされる。さらに説かれる教について「四悉檀を用いて觀教を起す」(大正蔵三十八・五二〇b)というように、智顗において、すべての教説が悉檀を用いて、佛と衆生との因縁によつて説かれるのである。このように佛土の淨穢や衆生の業報の土、佛の応現の土ということを説くこと自体が教説であるから、一概に定めるべきではなく、赴機の教として説かれるものであるとして、それぞれの衆生と佛との關係においてこそ示されるとする。つまり智顗において衆生と佛との因縁が重視されているのである。

そして智顗は『維摩經』に「心の淨きに隨いてすなわち佛土淨し」の句をもとに佛土説を展開してくのである。さらに続けて四土説を中心として天台の佛土説について検討する。

(三) 天台四土説について

四土説は佛国品の品題を解釈する『維摩經文疏』巻一において、四土について詳細に論じられており、界内は凡夫三界の衆生の土としての同居土、また界外は二乗・菩薩の土としての方便土、菩薩のみの土としての実報土、そして佛の土としての常寂光土と示される。これらは、それぞれの土に居する衆生やその断惑、無明の惑のあり方、もしくは行位によつて四種に分けられている。また、この四土説は『維摩經文疏』において土に約して解釈する場合にも用いられ、解釈のひとつの基準として用いられているのである。さらに、この四土説は『維摩經』解釈のみに説かれ用いられるのではなく、天台三大部やその他の天台の書物においても、四土の名称が見られ、天台の佛土説として用いられている。

先学の研究では、この四土説は、淨影寺慧遠の『大乘義章』淨土義における三種淨土をもとにして天台独自の思想によつて展開したものであるとされている。さらに、四土説において地論・撰論学派の縁集説が導入されていることも指摘されている。¹²⁾こ

のように智顗の四土説は、智顗以前の学説をもととしながら成立しているのであるが、淨影寺慧遠の三土説と異なった点が見られる。それは、佛土説における四惡趣の有無である。¹³⁾そこで智顗が四惡趣をその土の体系の中に含めた理由について考えていくことにしたい。

天台の四惡趣の扱いについて『法華玄義』では三法妙を明かす中、衆生法における十如是の権実を明かす箇所において、

十如是を以つて十法界に約す。謂わく六道四聖なり。皆な法界と称することは、其の意三有り。十数は皆、法界に依る。法界の外に更に復、法無し。能所合して称す。故に十法界と言ふ也。二に此の十種の法は分齊同じからず。因果隔別なり。凡聖異なり有り。故に加うるに界を以つてする也。三には此の十は皆な即ち法界にして、一切法を攝す。一切法は地獄に趣きてこの趣を過ぎず。当体、即ち理にして更に所依無し。故に法界と名づく。乃至、佛法界も亦復是の如し。

(大正蔵三十三・六九三c)

とあり、四惡趣を含む六道および四聖がすべて法界であることを述べている。そして、その一々はすべて法界に依るとしている。さらに、地獄ですらもその体は理であるとする。すなわち、天台においては、地獄も他の四惡趣も法界の一つであり、そのものは理そのものとしてしているのである。さらに、『法華玄義』では三法妙の佛法妙において、佛と法について、

佛、豈に別の法あらんや。祇だ百界千如、是れ佛の境界なり。唯だ佛と佛とのみ。斯の理を究竟したまう。……(略)……皆な権に非ず實に非ず。而も能く九界の権一界の實に應じて、而も佛法に於て損減する所無し。諸佛の法、豈に妙ならざらんや。

(大正蔵三十三・六九六a)

とある。このように、十界を互具した百界とその十如である千如すべてが、佛の境界であり、佛においては、十界のすべてに應じることが示される。そのため、天台の四土説には、地獄、餓鬼、畜生、修羅の四惡趣も佛土の中に含まれているのであろう。また、すべての法を摂し、すべての衆生を攝する土を佛土としているのであり、淨土と穢土を分別した上での淨土が、佛土として展開しているのではない。その四惡趣を含む衆生そのもののあり方が、佛法に他ならないのである。このことが、四土に四惡趣を含めている意味であり、天台四土説の特徴の一つであることが推察されるのである。また、これはあらゆる衆生が法性に他ならないということであり、またあらゆる

衆生が成佛しえるということを示そうとしているのではないだろうか。

(四) 四土説の体系とその構造について

この四土説において、同居土は界内、方便土と果報土は界外とされ、四土はそれぞれの土における所居の人の断惑論や証理によつて、いわゆる行位を用いて段階的に論じられ、各別なものとして論じられる。しかし、それぞれの土の関連についての記述もしばしば見られるのである。また、その関連は、「四土即離」^①として論義の一つとして扱われるようになる。そこで四土のそれぞれの関連について概観し、四土の体系とその構造にあらわされる天台の思想について考察を試みる。

まず、三界である同居土と界外である方便土、果報土の関連について見ていきたい。『法華玄義』利益妙、変易の益を述べる段では、見思の惑を破した人の所居である方便土について、以下のように論じられる。

九番に変易の益とは、此れは是れ、方便有余土の人の益なり。……(略)……若し分別して言わば、謂わく方便土は三界之外に在り。若し事に即して而も真なれば必ずしも遠きに在るにあらず。下の文に云わく、「若し能く深心に信解せば、則ち佛、常に耆闍崛山に在して、大菩薩声聞衆僧と共に圍遶せられ説法したまうと見ると為す」と。即ち方便土の意也。
(大正蔵三十三・七六〇c)

このように、分別するならば方便土は三界の外であるが、事に即して、しかも真であるとするならば、必ず遠くに在るわけではないとしている。続いて実報土の生を受ける人を述べている科でも同様に、

十番に実報土の益とは、即ち実報土の人の益なり。……(略)……若し分別して言を為さば、謂わく実報は方便の外に在り。若し事に即して而も真なれば、此れも亦た遠きにあらざる。文に云わく、「娑婆を觀見するに琉璃を地と為し坦然平正なり。諸台樓觀は衆宝の所成にして、純ら諸菩薩のみ咸く其の中に処す」と。即ち実報土の意也。
(大正蔵三十三・七六一a)

とする。これは、前の三界と方便土との説と同じく、分別するならば実報土は方便土の外にあるとしているが、事に即して真であるとするならば、分別して必ず遠くにあるわけではなく、娑婆世界において実報土を觀るとされる。こうして、三界、界内である同居土において、界外の方便土、実報土を觀るのであり、方便土と実報土が三界

に即していることが示されているのであろう。ではこの三土と常寂光土はどのような関係にあるのだろうか。以下でその関連を論じたい。

常寂光土と他の三土との関連について『維摩經文疏』では、

問うて曰わく、別に常寂光の土有るや。

答えて曰わく、然らず。只だ分段、変易、即ち是れ常寂光土也。螺髻の見る所穢に即して是れ淨なるが如し。更に別に求めざる也。故に經に、「譬えば諸天、宝器を共にして食するに飯色に異有るが如し」と云う也。(新統蔵十八・六二一b)としている。ここでは、常寂光土は別にあるのかという問いに対して、他の三土における分段、変易の二種の生死が常寂光土であるとし、さらに、この生死の土を離れて、別に常寂光土を求めるのではないとしている。また、ここで經証として引用されている『維摩經』の「譬如諸天共宝器食飯色有異」^②の解釈では、

「譬如諸天共宝器食飯色有異」とは、「宝器」は寂光を譬う、「飯色有異」は余の三土を譬う。余の三土の報、寂光を出でず。寂光に約して、垢淨、見る所、同ぜざるを論ずる也。
(新統蔵十八・五一八a)

と述べて、三土の報は常寂光土を出ないとしている。つまり、三土の根本として常寂光土を置いているのである。

さらに、この関連について、『維摩經文疏』の四土の質礙を論じる箇所には、「菩薩、佛慧に依りて三土を見るみなこれ常寂光土なり」「三土の衆生、常寂光土において三土の異質あるを見るなり」「十方の諸佛の心淨く仏土淨くして法性如如、平等法界、常寂光土の形無く質無きを見るなり」(新統蔵十八・四六七c、四六八a)とあり、佛の慧によれば、果報土を含む三土は常寂光土となり、衆生からみれば、常寂光土がそれぞれの三土として見られるとされているのである。つまり、隔絶された究竟なる土として常寂光土があるのではなく、三土の根底に理としての常寂光土があるとしているのである。また、この常寂光土について『維摩經文疏』卷二十三には、

今、六十二見の衆生、未だ道を成ぜざれば、菩提を煩惱と為す。故に六十二の煩惱有り。衆生、若し道を成ずれば煩惱を菩提と為す。六十二見、計して煩惱を生ずる所の処、即ちこれ菩提眞常寂の淨土也。
(新統蔵十八・六二一a、b)

と論じている。ここで煩惱を持った衆生は、本来の菩提を煩惱として觀てしまっているが、もし衆生が佛道を成じるならば、つまり佛になるならば、その煩惱が本来の菩提となるのである。すなわち煩惱の生ずるところこそが常寂光土になるとされ、衆生

が煩惱を生じている土に即して佛の常寂光土があることを明らかにしているのである。また、佛の所見と三界について『法華玄義』弁体では、

善惡、凡聖、菩薩、佛あり、一切、法性を出でず。正しく実相を指して以つて正体と為す也。故に寿命品に云わく、「三界の三界を見るが如くならず。如に非ず、異に非ず」と。三界の人の若きは、三界を見て異と為す。二乗の人は三界を見て如と為す。菩薩の人は、三界を見ることが亦如亦異なり。佛は三界を見ることが非如非異にして、双べて如異を照らす。今、佛の所見を取りて実相の正体為す也。

(大正蔵三十三・六八二b-c)

とある。ここで善惡も凡聖も菩薩も佛もすべて法性から出ることがないとした上で、それぞれの三界の捉え方について述べているのであるが、まず、三界に没在している衆生は、三界を俗として分別して見る。二乗は如として分別した但空の如と見、菩薩は三界を異(俗)とも如とも見、佛は三界を見て、異、如どちらにもとられずに双べ照らし、その佛の見るところが実相であるとしている。つまり、佛は三界において三界を実相として、常寂光土と観るとしているのである。この所観の境と佛の所観について『維摩經玄疏』の佛国の因果を明かす観心に以下のように述べられている。

心の性、本と淨きこと猶し虚空の如し、即ち是れ性淨の境也。境は即ち国也。觀智、この心を覺悟す。之を名づけて佛と為す。初觀を因と名づけ、觀の成ずるを果と名づく。……(略)……能く諸数の上惑を排し、以つて心源の清淨土に還る。故に心淨ければ、即ち佛土淨しと云う也。

(大正蔵三十八・五六〇b)

ここでは、心の本源が性淨の境であつて、この境が国であるとしている。また、この心は本来、性淨であることを覺悟しているものが佛とされる。つまり、ここに述べられている心源の清淨なる土が常寂光土なのである。すなわち「還る」というように、もともと本来の土としての国土は、常寂光土そのものであることを示していると見られるのである。そして、心の心源のままに煩惱によらずに観るならば、三界の国土が常寂光土として観られるということになるのではないだろうか。このように心が国土であつて、心のありようが国土のあり方となるとしているのである。この心と国土との関連について『法華玄義』三法妙では、

但だ衆生法は太だ広く、佛法は太だ高し。初學に於て難しと為す。然るに心、佛及び衆生、是の三、差別無ければ、但だ自ら「心」を觀じて則ち易しと為す。……(略)……根塵相對して一念の心起るを觀するに、十界の中に於て必ず一界に属す。若

し一界に属すれば、即ち百界千法を具して、一念の中に於て悉く皆な備足す。此の心の幻師は、一日夜に於て、常に種種の衆生、種種の五陰、種種の国土を造る。所謂の地獄の假美国土、乃至、佛界の假美国土なり。行人は當に自ら選択すべし、何の道に従うべきやと。

(大正蔵三十三・六九六a)

とある。初學のものにとつては、衆生法は無数であるために観るには広く、佛法は無上であり高すぎるとされる。そこで『華嚴經』を経証として心法と佛法と衆生法の差別は無いとした上で、己心の法を觀るとしている。つまり、果として説かれる佛の法や一切法として説かれる衆生法ではなく、その主体者自体の心において、常にさまざまな衆生、五陰、国土の三世間が造り出される。それは、地獄から佛までの十界の假美国土のありようであり、またそのあり方のいずれによるのかを、主体者に求めている。つまり、佛土である常寂光土を主体者の心において、それぞれの心のあり方によって、同居土とも、方便土とも、果報土とも常寂光土とも捉えていくのである。

(五) 小結

以上のように、天台の四土は本として常寂光土があり、その常寂光土は煩惱の生ずる処、つまり他の三土や三界に即しているものであり、佛としては三界がそのまま実相なる常寂光土とされるのである。また、方便土、実報土も三界において観るとしている。つまり、その土は、それぞれの觀によつて三界ともなり、また界外、方便土、実報土ともなり、諸法実相なる常寂光土ともなりえるのである。そして、佛国の因と果によるならば、衆生の土、前の三土は佛国の因であり、常寂光土は佛国の果である。この佛国の果は佛国の因に即するものであり、因も果に即する因果不二なる土とするのが天台の国土觀なのである。また土の分別について『維摩經玄疏』には、

但だ機に隨いて物を化するを以つて、其の真底の両身を説く、故に事理二土を明かす也。然るに本に非ざれば、以つて迹を垂ること無し。故に応形応土有り、迹に非ざれば以つて本を顯すること無し。故に物を引きて同じく法身の真国に歸す也。

(新統蔵十八・四六五c)

と論じられる。事理の分別、四土の分別は化導の為であり、衆生の機根に合わせたものである。理としての示される常寂光土・実相は『摩訶止観』歸大処に「強いて中道、実相、法身、非止非觀と名づけ……(略)……強いて首楞嚴定、大涅槃、不思議解脱、

止等と名づく」(大正蔵四十六・二一b)とされ、強いて名づけられているのであり、本来、分別相待によって捉えられない絶待として示される。しかし、相待分別によってしか示すことの出来ないものであるから、断惑や行位を用いて示されるのである。また、それは衆生そのものが理においては、常寂光土であり、その常寂光土に帰すために分別して四土として佛の国土を説いているのである。このように天台佛土説・四土説は、不可説・実相なる境について佛と衆生との因縁をもとにしながら説くのである、仏と衆生とその教化の様相を表しているであろう。

註

- (1) 智顗の維摩經疏撰述の経緯については、『国清百録』や『智者大師別伝』等参照。
- (2) 智顗の維摩經疏として、散逸した『維摩玄義』十卷(その離出本の『四悉檀義』二卷(散逸)・『三卷義』二卷・『四教義』十二卷)、『維摩經玄疏』六卷、『維摩經文疏』二十八卷(二十六卷以下は灌頂の補遺)がある。
- (3) 『維摩經玄疏』に「今、此の経は、抑揚し褒貶し、機に赴きて不思議解脱を説くは、猶お是れ方等の教なるが如し。」(大正蔵三十八・五六一c)とある。
- (4) 『維摩經文疏』卷一(新統蔵十八・四六四b)に僧肇、法雲、僧旻、智威などの科文が列举されている。
- (5) 『大乘義章』に佛土説について「昔より来、諸家の所説各異なり。生公の説くが如きは、佛は色身無く亦浄土無し。但だ物を化せんが為に応現して衆生の土の中に住すと。是の如く説く者は衆生には土有り、諸佛には則ち無しとす。什公の所立は異なり。諸佛には土有るも衆生には全く無し。但だ佛、化に随いて土を現すること不同なり。故に維摩に云く、「衆生を化せんが為の故に、此の土を現じて不浄と為す耳」と。(大正蔵四十四・八三七a)とある。また『注維摩詰經』における佛土説について木村宣彰著『注維摩經序説』、古田和弘氏『竺道生の佛無浄土論』(『印度学仏教学研究』十九卷二号所収)などの研究がある。
- (6) 国土苦楽(古宇田亮宣編『天台宗論義二百題』隆文館)五四三頁「国土の苦楽は衆生の業感なるや。はた諸佛の変現なりや」と問い『法華玄義』巻六をもとに「諸佛の変現、衆生の業力により、衆生の業力、まったく諸佛による。二義、相いもちいて依正成立す。なんぞ一辺に執せんや。いわんや玄文にすでに両意ありといふ」といった論義が見られる。

- (7) 前掲注六参照。
- (8) 神達知純氏は「天台教学における四悉檀の意義」(『印度学佛教学研究』五十七巻一号所収)において、「佛の説く法を己がいかに感じ佛道を修行していくか。佛と衆生という視点で捉えた智顗の四悉檀理解の要点はそこにあると考えている。」と四悉檀について述べている。

- (9) 例えば、「三惡八難、四土に約して料簡す」『維摩經文疏』巻八(新統蔵十八・六b)、「但実疾有重軽上以、四土に約して分別す」『維摩經文疏』巻十九(新統蔵十八・二〇〇b)、「空室所表の相を四土に約し分別して解釋せば…」『維摩經文疏』巻十九(新統蔵十八・二〇六a)など。

- (10) 浄影寺慧遠の三土説と智顗の四土説との関連について先学の研究、望月信亨氏は「四土説は恐らく慧遠の説を承け、之に多少の改修を加えたものである」と思われる。『中国浄土教理史』一一二頁)安藤俊雄氏は「形は浄影慧遠の三種浄土説と一致するが内容は全く別個のものである。」(『天台思想史』三九八〜三九九頁)とし、藤浦慧嚴氏は「支那における天台教学と浄土教」(二九頁〜一三〇頁)において、「智顗の佛身論は浄影慧遠の説に基づき是れに多少改良を加へ、且仁王般若經の三賢十聖は果報に住し、唯佛一人浄土に居すという説に中心を置き、維摩經の心浄土説、道生の佛無浄土説に支配され、更に又法華經の本迹説によりて立論されしを知る。」とされている。また、西郊良光氏は「佛土の捉え方について、慧遠の説を解釈して佛土觀を確立したといえるのではないだろうか。」(『天台大師の佛土觀』『天台学報』二十号所収)とされ、小林順彦氏は「地論宗の立場として八識の識心説を標榜とする慧遠と天台円教の三諦円融説を標榜とする智顗とは全く別の思想基盤に立つのであり、またその別個の思想を基礎にして發表された浄土説も異なる」(『天台の四土説について』『天台学報』三八号所収)と論じられている。

- (11) 慧遠と智顗の佛土説の対応

慧遠『大乘義章』三土	智顗『維摩經文疏』四土
事浄土……………同居土	
相浄土……………方便土	
真浄土・離妄真……………果報土	
純浄真……………常寂光土	

- (12) 青木隆氏『維摩經文疏』における智顗の四土説について」（『早稲田大学大学院研究紀要』別冊十一号所収）。
- (13) 智顗の四土説には同居土に四惡趣が含まれている『維摩經文疏』（新統藏十八・四六六a、b）。淨影寺慧遠の『大乘義章』においては、事淨土を二種に分け「一には、是れ凡夫求有の淨業所得の土なり。上諸天の所居等の如し。」（大正藏四十四・八三四b）とし、有を求める凡夫の善業によつて得る、諸天の所居。もう一方は、「二には、是れ凡夫求出の善根所得の淨土なり。安樂国、衆香界等の如し。」（大正藏四十四・八三四b）として、事淨土は、善もしくは淨の業によつて得られる諸天や淨土とされており、四惡趣は含まれていない。
- (14) （古宇田亮宣編『天台宗論義二百題』隆文館）二四八頁参照。
- (15) 『維摩經』（大正藏十四・五三八c）。
- (16) 『大方広佛華嚴經』（大正藏九・四六五c）。

天台維摩經疏における天台の思想について、四土思想を中心として明らかにしようとするのが本論文の目的である。また智顗の教学は智顗以前の佛教思想や論理を研詳去取し、独自の思想によつて体系化したものである。よつて本研究では、天台以前の維摩經の解釈書にまで研究範囲を広げ、天台以前の維摩經注釈の思想と天台教学との関連とその位置付けについて検討することによつて、天台維摩經疏の思想的特徴について論考した。

第一章では『維摩經』自体の成立やその思想、および中国における『維摩經』の流伝と受用について概観した。そこで天台教学に至る『維摩經』の研究は、中国における佛教の受容態度と羅什の妙訳、およびその思想が基盤となつて行われてきたことについて論じた。

第二章では『維摩經』の訳者である羅什およびその門下の僧肇、道生の注釈を集めた『注維摩經』の思想と天台維摩經疏との関連について検討した。特に羅什や僧肇の『維摩經』理解について、本迹の論理を手がかりとして考察し、羅什・僧肇が理論的に般若思想をもとに論じたのに対し、道生は般若思想についてより実践的にその理の絶対性を強調する性格をもつて解釈をしていることに言及した。智顗はこれら三師の思想について、いずれも天台の四教の中、通教に当る解釈としており、ここでさらに通教と僧肇の思想の関連について、空の解釈方法と三乗に対する理解から考察を試みた。

第三章では、智顗とほぼ同時代の学匠である浄影寺慧遠の『維摩經義記』の思想と天台の思想を比較することによつて、天台の思想的特徴について論じた。そこで『維摩經義記』における心識説として八識説が用いられることについて論じ、それに対して智顗は八識ではなく、六識こそ修行の体としていることに言及した。

第四章では、天台教学における智顗の『維摩經』観について検討し、『維摩經』の教相は、一往、方等時の褒貶抑揚教として、二乗に対して作佛、開会を明かさなない爾前の經典とされるのであるが、『維摩經玄疏』において四教を並べ説き、方便を帯びた円教を明かす經典として佛性常住が説かれるとするのである。また各品に対する四教の関連からすると、四教を並説しながらも円教の立場へと導くものとして、円教の立場が宣揚されていることを論考した。

さらに智顗は『維摩經』を佛国の因果を説く經典と捉えており、第五章以下では佛国・四土を中心としてその思想について論じた。そこで第五章・第六章において、まず智顗の佛国佛土観の特徴として、佛土の様相やその説示は衆生と佛との因縁によることを重視している点にあることを指摘した。さらに智顗の佛土説は、すべての法を摂し、すべての衆生を摂する土を佛土としているのであり、その四悪趣を含む衆生の理そのもののあり方が、佛法に他ならないとするものであり、これが天台佛土説の特徴の一つであることを推察した。

第七章において、四土説に見られる天台の思想について四土の体系から考察を試みた。天台の四土説は主に、それぞれの土における所居の人の断惑論や証理によつて、いわゆる行位を用いて段階的に各別なものととして論じられる。その中、常寂光土を極地・妙覺の所居としているのであるが、その関連を見ると、四土の本として常寂光土があり、他の三土や三界に即しているのであつて、佛としては三界がそのまま実相なる常寂光土であることを指摘した。また、方便土、実報土も三界において観るとしてある。そのそれぞれの観によつて三界ともなり、また界外、方便土、実報土ともなり、諸法実相なる常寂光土ともなりえるものとして論じられていることに言及した。そして、佛国の因と果によるならば、衆生の土、前の三土は佛国の因である。常寂光土は佛国の果である。この佛国の果は佛国の因に即するものであり、因も果に即する因果不二なる土とするのが天台佛土説であることを論じた。

第八章では常寂光土が佛の実相なる土とされることをもとに、維摩經疏に説かれる天台教学と実相について検討した。維摩經疏に述べられる不二は実相の理そのものを顕すものであつた。それは、不可説・不思議なるものであるが、佛と衆生との因縁によつて説かれるものである。その実相の理そのものは衆生が求めるべき佛の境そのものであり、それは、衆生の体として具えられているものに他ならないのである。また因縁和合の法そのものが衆生を含めてすべてが仏の境界というのであり、本来、すべてが実相であり、衆生を含めて佛の境界であることを示しているのを常寂光土とし、かつ常寂光土において因縁和合の理そのものの三觀による捉え方によつて四土の別があるとしていることについて論及した。また四教によつて、実相の境、維摩が一黙として示した不二に入つていくことを説いていることについて考察した。

このように、智顗は維摩經疏において『維摩經』にとかれる佛土説を四土として解釈することによつて、実相なる境と仏教全体の教化の様相を説いていることを論じた。